[跨境人]

夢と性愛

田　原　✉ tianyuan65@gmail.com

自分で満足のいく詩を完成させるたび、それはいつも私に精神的なエクスタシーをもたらす。これがたぶん私が詩の創作から離れられない、やめることのできない重要な原因の一つだろう。

夢と性――精神と肉体の二重奏！

夢と性――二つの互いにつながり合っている歴史的命題！

私は麻薬を吸った経験はないし、麻薬を吸ったときの肉体と精神の快感がどの程度のものなのかも知らない。しかし私個人の詩作の経験から言うと、詩の創作は精神的な中毒に近いと言うべきだろう。集中し、夢中になり、無我の境地になる。そこにはもちろん詩歌に対する最大の敬虔を含んでいなくてはならない。詩歌の麻薬はマリファナやヘロインではなく、インスピレーションと言葉である。一編の詩が私に与えてくれる快感は、私が本で読んだことのある麻薬を吸ったときの快感に劣るものではないだろう。

詩歌の創作と性愛は本質的に同じで、ただ精神か肉体かの違いだけだ。

夢は知覚現象学で言うと形象思惟の産物である詩歌よりは早いが、肉体を源とする性愛は、疑いもなく夢より早い。肉体がなければ、夢や性愛はなく、肉体は夢の揺りかごであり、詩人の霊感と言葉は、まず肉体より来る。ヘーゲルが言うように、「我々は体の存在そのものであるが、体が実際はその存在を忘れていることを軽んじている」。ここでまた時代を覆う大儒のサルトルに敬意を表さなければならない。彼はその奥深い筆ではっきりと実存主義の輪郭を描き出したのだ。我々が存在するだけで、夢と性愛はそこからやってきて、命が終わるまで我々に影のように寄り添うのだ。

誰もが皆、肉体の賛美者であるべき、あるいは肉体を肉体の主人にすべきである。たとえ聖人であろうが凡人であろうが。私は性の天真爛漫な崇拝者あるいは肉欲主義者ではないが、古代の性崇拝の岩絵には深く感動したことをはっきり覚えている。しかし私は美しい性愛を、単一の本能の解放ではなく、精神と生命の原動力だと理解したい。性愛は人間の原始的な欲望である食欲・性欲・知識欲の一つにして、ある意味、言語と理性を超越している。肉体の賛美者として、画家がまずあげられるだろう。というのは彼らは優越感を持った視覚芸術の中で、肉体の抽象性や写実性を極限まで表現するからである（機械技術を通したカメラマンはここには入らない）。そしてその次が詩人だ。というのは、肉体は彼らの感性と詩意の言葉によって、鋭く奥深く、味わい深く表現されるからだ。前者は手で触れそうな実感があり、五感を刺激するが、後者は文字を通して想像の世

界を構築する。

単純な夢は短い回想、或いは長い間忘れていたものに過ぎない。

あるインタビューの中で私は夢と詩の関係について話したことがある。「夢は詩と姉妹であり、想像は私生児だ。夢は時にインスピレーションの一種である。ただそれは恍惚、神秘、不確定でぼんやりした薄衣を纏っている。夢とインスピレーションはそれぞれ独立した概念を持っているが、共有する性格を持っている。区別が付かず、油断すると消え去ってしまう。それらに手が届くと我を忘れて集中する。夢は目が覚めた後も覚えていなければならない、インスピレーションはそれを御する能力を求められる。夢は言語の前の無言語状態、無意識と意識の間にあり、肉体と魂の間にある。夢はどのように形成されるのだろうか。私はフロイトの『夢分析』にははっきりと書かれていない、解釈を拒絶していると思う。私の詩の中には確かに夢からできたものがあり、またしょっちゅう夢の中でも詩を書いている。しかし夢自体は詩ではなく、詩は夢の忠実な黙約であり、夢の忠実な記録ではない。それには詩人が自分のペンで詩意化する必要があり、削り込み繊細な彫刻に仕上げるような過程を経ることで、夢は一首の詩となるのである」。

私は「夢」という短い詩を書いたことがある。

銀色の世界の中
白皚々の父が船先に立って
軽々とさおさして
船は水を漂って行く

島から陸地までは
一夜の距離である

——（財部鳥子 訳）

同じように、単純な性愛は肉体の飢餓の満足でしかない。ここで私が強調したいのは、精神性ということだ！ 精神と肉体のバランスと言っていいかもしれない。愛は二つをつなぎ貫く鎖である。詩歌の創作はある意味、他者への愛だと思う。この他者とはとうぜん狭義の性の違う男女を含むだけでなく、世界の万物を広く指している。たとえばそれは詩人によって隠喩にって隠喩にされた一本の川、一本の木、地平線、あるいは死に対する悲しみの瞳などかも知れない。精神性は情感と理解してもいいかも知れない。情感のない性愛は無味乾燥で、情感や理性を通していない詩歌は味気ない。中国は古代、体と心の統一、精神と肉体の統一を論じた。これは古代ギリシャのプラトンが肉体の最も美しい境界を「心の優美と肉体の優美が調和し一体となっていることだ」と定義したことと一致し、呼応している。

一般的に言って、体が魂の根源であることは疑いようがない。しかし詩人にとっ

て、夢と性愛も同じようにインスピレーションの揺りかごであると思っている。ショーペンハウアーは体を「意志の客観化」と定義し、理性的認識の解釈を確立した。この種の概念には合理性と純粋性がある。夢と性愛は不可分で、肉体を離れて夢は存在しない。夢を持たない肉体は味気ない。肉体の記憶の欠乏を支えるのに、夢はまったく無力となる。逆もまた同じである。性愛は精神の記憶の潤滑剤であり、それが長く深いと、性愛も同じように豊かなイマジネーションの甘露となる。

私はかつて夢の色と形を描こうとしたことがある。夢の色と形を私の詩学の中で表現しようとしたと言っても良い。しかしやってみてわかった。これは長く根気の要る挑戦であり、自分が夢にがんじがらめになって、身の程知らずと感じさせられることさえあった。夢を捕まえることは精神的に危険な目に遭うようなものである。夢は隼のようなスピードで美しい姿を目の前に現したかと思えば、雷のように心の天空を切り裂き、防ぐいとまもない。紅葉を赤く色づかせ近づいてくるのを待ち伏せし、合口を懐に忍ばせて命を奪おうと暗闇に潜んでいるかも知れない。夢が表すのは抽象であり、詩意化の抽象性と相通ずるところがある。夢に欠乏しているのは具体性である。というのはそれには文字や記号がないからだ。

唐代の詩人は数え切れないほど夢の詩を書いている。李白、杜甫、白居易、杜牧らはみな人口に膾炙した詩編を残している。その中で唐の顧況の『夢後吟』は最も平易な言葉で精神と肉体の統一を描いている。

醉中还有梦，身外已无心。
明镜唯知老，青山何处深。

酔いの中にもまだ夢があり、
身体の外にはもう心はない。
明鏡はただ老いを知るのみ、
青山は何処が奥深いだろう。

鬼才・李賀は中国古代のシュールレアリスムの詩人であると私はずっと強く思っているが、彼の『題帰夢』の「労労一寸心，燈花照魚目 / 労々たり一寸の心、燈花 魚目を照らす」は更にすばらしく、夢の世間を驚かし俗人をびっくりさせる精神的張力を描き出している。

夢と性愛の血脈は通じている。最後に以前読んだことのある一文を引用してこの文章を締めることにしよう。

「心(夢あるいは精神)が唯一の灯りではない、肉体(性愛)がなければそれは光り輝くことはできない」。

2014年5月 日本にて

田原 Yuan TIAN

詩人、翻訳家。1965年、中国河南省生まれ。『谷川俊太郎論』で文学博士号を取得。現在(日本)城西国際大学客員教授。中国語、英語による詩集で、中国・アメリカ・台湾での詩の文学賞を受賞。第1回留学生文学賞受賞(2001)。日本語による詩集に、『そうして岸が誕生した』(東京：思潮社，2004)、第60回H氏賞受賞作『石の記憶』(東京：思潮社，2009)がある。『谷川俊太郎詩選集』(東京：集英社，全3巻，2005)などを編集。ほかに博士論文『谷川俊太郎論』(東京：岩波書店，2010)、『田原詩集』(東京：思潮社，2014)なども刊行。